

中川八郎

生誕一四〇年記念



中川八郎(風景(投網))明治時代後期 水彩・紙

2017年11月14日【木】～2018年1月28日【日】

1877(明治10)年、中川八郎は愛媛県喜多郡天神村(現在の内子町)に生まれました。幼くして両親をうしない、叔父を頼って上阪した中川は、家業をきっかけに日本画を学びはじめますが、18歳の時に第4回勸業博覧会で眼にした油彩画をきっかけに洋画へと転向します。その後、松原三五郎の天彩画塾に学び、1896(明治29)年には上京して、小山正太郎が主宰する不同舎に入り、この頃、日本の水彩画最盛期に活躍した吉田博、丸山晩霞、大下藤次郎らと出会いました。

そして22歳の時、中川は吉田と共に渡米し、展覧会を開催すると、その収益によって翌年に渡欧を果たします。また、帰国後の1902(明治35)年に発足した太平洋画会に参画し、1907(明治40)年に始まった文展で受賞を重ねると、1911(明治44)年からは審査員となり、画壇での地位を確立していきました。意欲的に国内外の写生旅行を続けていた中川ですが、ヨーロッパでの写生旅行中に体調を崩し、1922(大正11)年に帰国した3日後帰らぬ人となります。

中川の44歳という短い生涯は、日本の水彩画家が大きく動いた時期に重なります。多くの作家が、西洋と日本のはざまで、その表現に揺らぎを見せるなか、中川は自らの画風を見失うことがありませんでした。終生の友人であった吉田は、中川の遺作集に次の言葉を寄せています。

〈彼の芸術は彼の性質そのままの厳粛穩健さを見せ、些かの衒気もなく、「真面目」そのもの一貫した表現であった。〉

本展示では、生誕140年を記念して、当館所蔵の中川八郎全作品をご紹介します。水彩と油彩双方において、独自の静温な色彩感覚と巧みな筆致により、抒情性あふれる風景画を描いた作家の世界観に少しでも触れていただければ幸いです。(喜安 嶺)



中川八郎(都野残雪) 1920年 油彩・画布

Column

作品保存のおはなし

美術館の宝物箱『収蔵庫』

美術館には、『収蔵庫』という作品を保管して置くための大きな部屋があります。厚さ10cmを超える金属性の扉には、銀行の金庫室のように丸いハンドルにダイヤル式の鍵までついています。そこは、温湿度が一定になるように、収蔵庫外周に空間を設け、部屋の壁は杉板で覆い、年間通して24時間22℃50%程度に設定しています。人が立ち入らない限り灯りもつけません。作品劣化原因となる虫・カビ対策として、出入り口には大きな粘着シートを設置したり、年に一度「燻蒸(薬剤による駆除)」を実施したりしています。また、学芸員による定期的な埃払いの掃除も欠かしません。

大きな絵画作品は、ラックという金網に掲示した状態で保管され、掛け軸や版画作品などは、箱に入れ棚に並べられています。日頃は一般の方の目に触れない収蔵庫。当館の宝物(所蔵作品1万点超え)が展示室に並べられるまでの間、大事に保管されています。(田代 亜矢子)



Canforo

No.55

Canforo カンフォロとは？

イタリア語で「くすのき」を意味します。愛媛県美術館の中庭に立つ3本の大きなくすのきにちなんでつけられました。

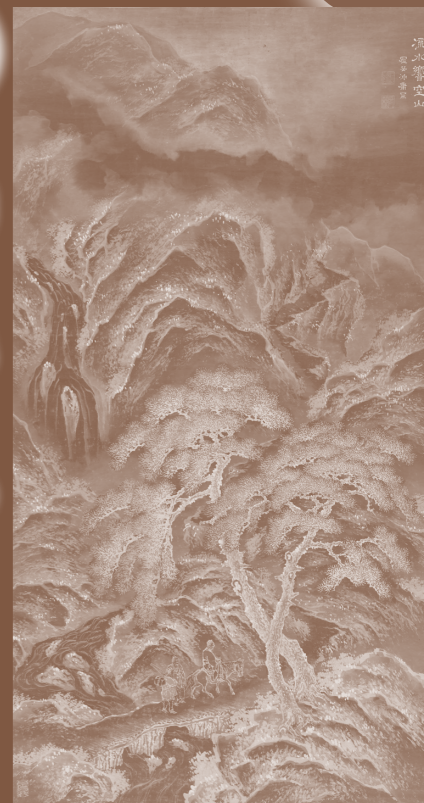
O K I K A N G A K U



沖冠岳(鹿に萩) 今治城蔵

生誕
200年
記念

沖冠岳と江戸絵画展



沖冠岳(月下吼虎図)(部分)
個人蔵/当館寄託

沖冠岳
今治城蔵

企画展

2018年1月20日【土】～3月25日【日】

主催:「沖冠岳展」実行委員会
(愛媛県、愛媛新聞社、あいテレビ)

沖冠岳は、江戸時代後期の今治に生まれ、京で画道を修行し、江戸で活躍した画家です。

幼少時には郷里の今治で猿の絵を得意とした医師の山本雲溪を師としたようですが、やがて京へ出て岸派の門人となりました。岸派の祖は虎の絵を得意とした岸駒です。円山応挙から学んだ写生を基本としながらも、中国から伝来した濃厚な写実表現を取り入れ、洋風画からも影響を受けたとみられる岸駒や岸岱の華麗な画風は、冠岳に多大な影響を与えました。

そうして京都で獲得した技量と個性を携えて江戸へ進出した冠岳は、谷文晁派を中心とする文人書画壇で活動を始めました。一時期は伊勢国の神戸藩に仕官しましたが、幕藩体制が揺らぐ中、藩を離れて活動を再開。品川の旗岡八幡神社に大絵馬を制作し、明治初期には浅草の浅草寺に巨大な絵馬を制作しました。

明治4年には今治へ帰郷。今治の綱敷天満神社や大浜八幡神社のほか、広島の大分神社や讃岐の金刀比羅宮にも絵馬を制作。吹揚神社に奉納される今治城の図も制作したと伝えられます。

その画風は、岸派の力強い写生と華麗な色彩を基調としながら、江戸風の洒落た趣向にも富み、典雅な知性と庶民のしたたかなエネルギーとを合わせ持っているように思われます。幕末維新期という時代を反映しているのでしょうか。

平成29年、沖冠岳が生誕200年を迎えたことを記念して開催する本展覧会では、冠岳の多彩な画業をその生涯とともにたどります。師友を中心に同時代の画壇をも一瞥し、宇和島の大内藤圃や西条の小林西台の作品も紹介します。幕末江戸画壇における伊予人の活躍に触れていただく機会となれば幸いです。(梶岡 秀一)



愛媛県美術館
〒790-0007 愛媛県松山市堀之内
TEL 089-932-0010 FAX 089-932-0511
<http://www.ehime-art.jp/>

ご利用案内

■開館時間 9:40~18:00(入室は17:30まで)
※企画展及び貸展については、入室時間が異なります。
各展覧会のページでお確かめください。
■休館日 月曜日
(祝日、振替休日及び第1月曜日に当たる場合は開館し、その翌日が休館日。年末年始は12/29~1/3が休館日)

つぶやき



国立西洋美術館で1月28日まで開催中の「北斎とジャポニスム」展に当館所蔵のモノエ《アンティーブ岬》を展示しています。同展図録のジャケットには《アンティーブ岬》が掲載されています。どうぞ御高覧ください。(武田 信孝)

YANO
KYOSON



矢野橋村(筆畷園)
昭和2年(1927)
日本南画院展出品
個人蔵(当館寄託)

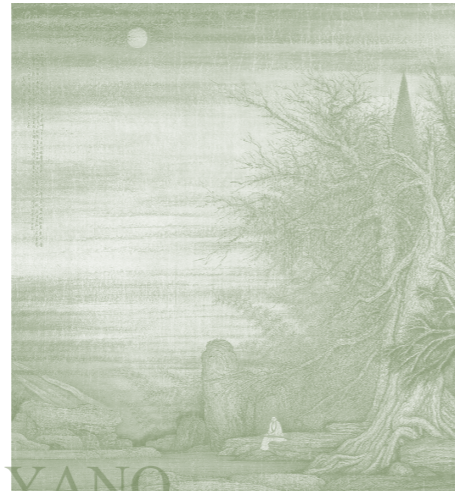
江戸時代後期に活躍した画家、沖冠岳とその師の山本雲溪はともに今治の人ですが、この今治からは近代にも重要な画家たちが出ています。横山大観率いる再興日本美術院(院展)で活躍した日本画家の大智勝観とその門人の四田親水、大阪を拠点に活動した南画家の矢野橋村とその甥の矢野鉄山、洋画家の野間仁根等です。そこで今回、「生誕200年 沖冠岳と江戸絵画」の開催に連動する小企画展として、同じ今治出身の橋村と鉄山の作品を集めます。

橋村も鉄山も、近世の池大雅や与謝蕪村、浦上玉堂、田能村竹田以来の南画・文人画の伝統を受け継ぎながら、そこに近代の造形感覚や美術思想を取り込み、新時代の南画・文人画を創造しようと奮闘しました。その主な発表の場となったのは、官設美術展覧会(日展の前身となす文展や帝展)のほか、同志とともに結成した日本南画院という団体の展覧会でした。

個人蔵のコレクションを中心に構成する今回の展示では、日本南画院展や文展、帝展等への出品作を含む橋村と鉄山の名品を展示します。「沖冠岳と江戸絵画展」と併せて御覧くださいませようお願いします。(梶岡 秀一)

所蔵品展 矢野橋村と 矢野鉄山

2018年2月3日(土)~4月中旬(予定)



YANO
TETSUZAN
矢野鉄山(孤琴汚筆)
昭和4年(1929)
帝展出品/特選受賞 当館蔵

所蔵品展 ヨーロッパ美術にみる 自然と人間

2018年
2月3日(土)~4月中旬(予定)



ウージェーヌ＝レイ・ブーダン(プレスト、停泊地)1872年

パリをはじめ諸都市が膨張の一途を辿る19世紀フランスに於て、失われゆく自然への愛惜の念が強まる中、1830年代頃から森林や農牧地帯の風景画が流行したことは、今や誰もが知る美術史上の出来事です。その後も地球全体の開発が続けられた結果、環境問題が顕在化し喫緊の国際問題として認識されて久しい21世紀の現在、宇宙船地球号の乗組員である私達一人一人に、この難問と向き合うことが求められています。私達は、自然が恒久不変のものであるかのような幻想を抱き、これに甘え、いつしか自然への愛を忘れて、細やかな配慮を疎かにしてきたのかもしれない。

本展では、自然と人間の幸福な共生を示す19世紀ヨーロッパ美術を展示します。コロアが優美な自然の中に母子を配した抒情的な絵画。ブーダンが舟船と建物のある人けの無い海のほとりの光景を描いた静謐で壮麗な絵画。セザンヌが水門と思しき人工の構造物のある水辺の無人の景色を表現した光揺らめく作品。ポナールやグラッセが華やかな色を用いて植物と女性を取り合わせた装飾的な作品。近代美術の巨匠達が創造した理想郷を前に、自然の尊さや美しさ、大切さを見つめなおす機会として頂ければ幸いです。(武田 信孝)

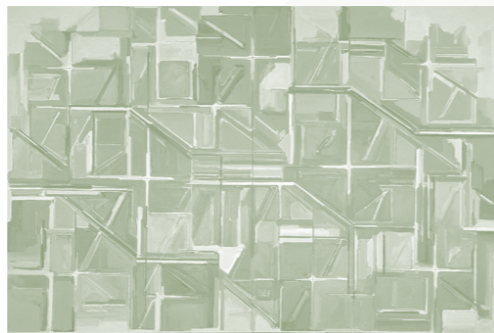
所蔵品展 線と面と空間と

—やさしい世界の描き方— 2018年2月3日(土)~4月中旬(予定)

私たちが暮らす世界を芸術家たちは様々な方法で表現しています。例えば「線」—まず、描く対象の概略をとらえるときに、単純な線を引きます。さらに、線を繰り返してより具体的な形状を表現。そして、そのようなたくさんの線から「面」が構成され、そこからさらに「空間」が生まれます。同じ「線」で表現している作品でも、線のかたちや色、意味がいろいろと異なったり、世界を表現する方法は様々で面白いのです。

山田正亮のこの作品の場合は、幅4メートル近い大画面に様々な色で幾何学模様のように線と面が入り組んで画面を構成しています。この模様の様式は時代とともに変化し、またごく初期は瓶やコップなどの周囲の身近なものを描いた静物画から始まっています。各時代での、作家による世界の見え方を抽象的に概念化して表していると言えるでしょう。

やさしい、シンプルな線から生まれ出る複雑で多様な世界の情景を、油彩や素描、版画などの様々な技法による作品を例に、ご紹介いたします。(杉山 はるか)



山田正亮(Work F.140) 1992年

普及レポート

ペーパーバッグをつくらう

平成29年年6月18日(日)・25日(日)

「これ、もったいないなあ」と思ったのが、今回の講座のスタートでした。館内外に掲示してある展覧会のポスター。展覧会が終了すると、はがされて処分されてしまう運命です。デザインも格好いいし、紙質も丈夫。「何かに使えないものか…?」と思索した結果、思いついたのがポスターを用いた「ペーパーバッグ」です。

講座一日目は「図書コーナー」での実施。市販の紙袋を鑑賞し、紙袋の構造を確認した後、各自好みのポスターを選択し、オリジナルのペーパーバッグを制作していきました。

小学校低学年の参加者も多く、制作方法が少し難解な部分があったため四苦八苦しているようでしたが、親子で協力し制作していきました。

講座二日目は、事前の申込者が少なかつたため、当日参加を募ろうと、人目につきやすいエントランスホールで実施しました。すると、こちらの予想以上に参加者が集まり、最終的には20名を超える方々がペーパーバッグづくりに挑戦していただきました。

今回の講座で、身の回りにあるものをリサイクルすることを通して、物を大切にする心を改めて感じることもできました。役目を終えたはずのポスターたちも、新たな姿に生まれ変わり、これからさらに活躍することでしょう。(楢垣 正)



普及レポート

29年度愛媛県美術館・博物館
小中学校共働による人材育成事業

ただ今、 「授業」実験中

「A君最近よく手が挙がるんよ!他の授業でも!」これは今から5年前、小学校での対話型鑑賞連続授業(10回)の試みに協力してくれた教室で、クラスメイトの少年が笑顔で教えてくれたA君の変化の様子です。幸いこの連続授業は毎回録音していたので、再度授業の様子を見直してみました。すると、なるほどA君5回目以降、どんどん手が挙がっています。そして回を追うごとに手が真っ直ぐに伸びていったのです。

対話型鑑賞は学び手が主体となって「みる→考える→話す→聴く」という思考サイクルと「どこから、そう思う?」という根拠を問う質問を中心に、物ごとの見方・考え方を培っていく鑑賞教育の名前です。美術館から始まったものなので、当初は「美術作品」の鑑賞力の向上が目的でした。しかし、実践と研究が積み重なるにつれ、今後日本の教育でも必要とされる観察力・批判的思考能力・言語能力・コミュニケーション能力の育成にも役立つことがわかり、近年は「美術」以外の分野で応用が始まっています。愛媛県美術館でも県内の博物館・小中学校の有志とともに、平成27年度より文化庁の補助を得て、全教科を見据えた授業実験を現在繰り返しています。「A君」の手元に成果が届くまで、あともう少しです。(鈴木 有紀)



つぶやき



最近、小学2年生の友人、Cちゃんと「自由研究」研究会を始めました。Cちゃんの研究テーマは「民族衣装」。どうしてその服を「民族衣装」としているか?がCちゃんの研究動機だそうです。私のテーマは「ブーダンの弓」。真剣に楽しめます。(鈴木 有紀)

ハトの声 編集後記



普及レポート 一日講座

大きな風船を つくろう

平成29年7月9日(日)・23日(日)



大きな風船の材料となるのはどこにでもある家庭用透明ビニール袋。まずは袋の2辺を裂いてシート状にした6枚を貼り合わせカーペットのような広いシートにし、その上に思いっきり好きな絵を描きます。続いて、みんなで描いたシートでひと遊び。4人がシートの四隅を持ち、それ以外の子どもはシートの下に仰向けになって寝転びます。シートを持った子どもたちが、シートを上下に変化をつけて動かすと、寝転んだ子の視線には空を背景に透明のシートに描かれた自分たちの絵が様々な動きで見えます。そのシートの動きや音に大興奮。シートで遊んだ後は、並行する2辺をテープで貼り合わせ筒状にし、筒の開いている一方の口をテープでふさぎ、袋状にします。大きな袋の中に走って空気をいっぱいに入れ、口を閉じて、風船の出来上がり!急いで口を閉じないと風船はしぼんでしまうので、再び袋を持って走らなければいけません。申し遅れましたが、この講座、梅雨の終りの蒸し暑い屋外で実施しています。子どもたちは暑さを物ともせず、公園の中を走りまわり、風船と戯れました。緑の公園の中を子どもたちと大きな風船が駆け巡る光景を見ていると、風船にまで生命が吹き込まれ、風船も楽しげに遊んでいるように見えました。(石崎 三佳子)



2017年を振り返ると愛媛県は国体で沸いた年でした。美術館も国体の開会式に来県された天皇皇后両陛下をお迎えするなど、記念すべき年になりました。今年は平成の節目(最後の)年。沖冠岳展にはじまり、愛媛県美術館らしい展覧会やプログラムを発信できればと思います。(石崎 三佳子)